

OED Online における初出年から見た複合形容詞の分析

Analysis of Hyphenated Complex Adjectives Based on the Date of
First Recorded Use on *the OED Online*

西部真由美

NISHIBU Mayumi

愛知大学国際コミュニケーション学部

Faculty of International Communication, Aichi University

E-mail: mmishibu@vega.aichi-u.ac.jp

Abstract

This study chronologically examines the morphological features of hyphenated complex adjectives (i.e., adjectives of derivatives and compounds) on *the Oxford English Dictionary (OED) Online* by analyzing the date of the first recorded use. It has been revealed that derivatives account for 30% of all the hyphenated complex adjectives adopted as headwords, and they appeared increasingly in the periods of 1600 to 1650 and 1800 to 1900. From the mid-16th to 17th century, compound adjectives with past-participial and de-nominal *-ed* endings were predominant. In contrast, from the 19th to 20th century, those converted from verb phrases, noun phrases, and neo-classical compound adjectives replaced the dominant positions.

1. 予備考察

1.1. 複合形容詞の認定

複合形容詞 (compound adjectives) は2つ以上の語根 (roots) から成る形容詞のことで、限定用法で名詞を修飾する場合には、構成要素はハイフンでつながれている。ただし、-ly 副詞の後に形容詞などの要素が来る組み合わせではハイフンは施さないのが通例である。

言語学上の前提として、以下の2点を確認しておきたい。構成要素の2つのうちの1つが接辞 (affixes) のみであるものは複合語とは認定されない。接頭辞 (prefixes) ・接尾辞 (suffixes) は定義上、単独では語 (根) にならず、他の語基に接合して意味をなす拘束形態素 (bound morphemes) である。1つの語基に接頭辞や接尾辞が接合した語は複合語ではなく、派生語 (derivatives) と分類される。したがって、接頭辞 (*self-, under-, non-* など) で始まる2要素の語や、接尾辞 (*-like, -hood, -ship*) で終わる2要素の語などは、通常は複合語には含まれない。

2点目は、接辞に類似した、例えば *Anglo-, bio-, mono-, multi-, socio-, super-, pseudo-, -graphic, -phonic* のようなギリシャ語やラテン語を語源とする語根は、連結形 (combining forms) と呼ばれる。連結形は、拘束語根 (bound roots) で、複合語の最初か最後の位置を占めるので接辞に似ているが、連結形は1) 単独の語と同様に明確な意味を有し、2) 自由語根 (free roots) がなくても、2つ以上の連結形で語を形成することができ (*e.g., electrophonic*)、3) 接辞と接合して単語を形成できる (*e.g., non-graphic*) という点で接辞と異なっている。連結形の多くはギリシャ語やラテン語が語源であり、直接あるいはフランス語を経由して、16世紀以降に英語に取り入れられた。したがって、このような連結形を含む複合語は、新古典複合語 (neo-classical compounds) として区別される (Bauer, 1983)。また、20世紀後半からは、このような連結形が学術用語や科学技術用語に広く取り入れられた。

以上から、2つ以上の構成要素からなる形容詞には、派生語 (形容詞) と複合形容詞があり、複合形容詞のなかには新古典複合形容詞と呼ばれるものがある、とまとめることができる。

しかし、実際にはこの分類は単純なものではない。派生語と複合語の間には明確な境界線を設定することが困難で、研究者あるいは辞書編纂者によって選定される語が異なる場合が多い。実際に、*OED* で採用されている連結形という区別の必要性を認めず、連結形をすべて接辞にまとめている辞書も多い。例えば、上級英語学習者用の英英辞典のうち、Oxford, Merriam-Webster系は連結形を採用しているが、Longman, Cobuild, Cambridge系は接辞に包摂している。

さらに、どの形態素を接頭辞・接尾辞に含めるかについても議論が分かれており、その判断は研究者自身や辞書編纂者に委ねられている。2000年以降に出版された英英辞典のな

かでも語源に詳しいOEDでは、接辞・連結形および語基（または語根）を区別しているが、生産性のありそうな要素は全て接辞としている辞書もある。

次節では、「接辞」について考察していく。

1.2. OEDにおける接頭辞と接尾辞

語形成の過程で、時を経て、特定の要素（多くの場合個別の語）に接合する語根のタイプ数が増加して生産性が高まり、その要素の意味が一般化すると、研究者や辞書編纂者の多くが接辞だと認定し始める。昔の古英語・中英語・近代英語から現代英語への変化だけではなく、現在の英語も変化の過程にあると考えられる。

第3版となるOED Onlineでは複合形容詞の記載に大幅な改訂が試みられていることは拙稿（Nishibu: 2019, 2021）で述べたが、複合語の記述の改訂に関連して、接辞の記載も改訂されている。ここで、第3版で加筆された事項を見てみよう。次の(1)は、見出し語 *affix* の、(2)は見出し語 *prefix* の記載の抜粋である。

(1) *affix*

...3. *Grammar*. An element (as a prefix, suffix, infix, etc.) added to the base form or stem of a word, in order to modify its meaning (in inflection) or create a new word (in derivation), or for reasons of euphony.

接辞（前文省略）3. 文法。（屈折で）意味を変化させ（派生で）新語を造り出すために、あるいは音便のために、語基や語幹に付加される（接頭辞、接尾辞、接中辞などの）要素。

In some technical contexts applied only to inseparable particles, but more loosely including combining forms and sometimes prepositions and adverbs as an element in compounds.

専門的には分離できない小辞だけに用いられることがあるが、広義では、連結形を含み、複合語の要素となっている前置詞や副詞も含まれることがある。

（下線と訳は筆者。第3版で改訂済み。最終版：2021年3月）

(2) *prefix*

1 a. *Grammar*. An element placed at the beginning of a word or stem to adjust or modify its meaning, or (in certain languages) as an inflection.

接頭辞。1a. 文法。意味の調整や修飾のために、あるいは（特定の言語では）屈折として、語や語幹の先頭に置かれる要素。

In some technical contexts applied only to inseparable particles, but more loosely including initial combining forms and sometimes prepositions and adverbs as the first elements of compounds.

English prefixes inherited from Primitive Germanic seem all to have originally been distinct words, and many have been reduced to one or two syllables, and sometimes to a single letter, as *be-* in *before*, *over-* in *overween*, *a-* in *arise*, *y-* in *yclept*, etc.

専門的には分離できない小辞だけに用いられることがあるが、広義では、語頭の連結形を含み、複合語の語頭の前置詞や副詞を含むこともある。ゲルマン祖語由来の英語の接頭辞はすべて、元来は個別の語であったようだが、多くが1音節か2音節に縮められ、1文字だけになることもあった。例えば*before*の*be-*、*overween*の*over-*、*arise*の*a-*、*yclept*の*y-*など。

(下線と訳は筆者。第3版で改訂済み。最終版：2020年12月)

引用(1)と(2)において、定義の部分は第2版と変更はないものの、英語の下線部は第3版で加筆された内容である。接辞や接頭辞が「広義では、複合語の連結形、前置詞、副詞まで含む」と記載され、その定義の曖昧性を容認している。また、接尾辞(見出し語*suffix*)は改訂されていないままである。

第3版では、見出し語となっていて現在も使用が認められる接頭辞は165項目、接尾辞は336項目である(2021年9月時点)。接頭辞は古英語初期には*over-*、*self-*、*through-*、*down-*、*with-*、*after-*、*un-*、*in-*、*off-*の出現が確認されている。接尾辞は*-rights*が古英語で出現し、それ以降は*-ward*(1000年頃)、*-is/ys*(1297年)、*-wards*(1374年)が、15世紀には*-some*、*-y*、*-lewe*、*-like*、*-ship*、*-wick*の初出が記載されている。

1.3. OEDにおける連結形

連結形については、1989年のOED第2版からの改訂が完了していない。その記述は(3)の通りである。見出し語は*combining*(名詞)であり、その下位項目の複合語の箇所に解説を含んだ例が載せられている。

(3) combining form

Combining *n.* ...

COMPOUND

C2. combining form *n.* (see quot. 1942).

1942 B. Bloch & G. L. Trager *Outl. Ling. Anal.* 66 In Latin and other languages, many words have a special combining form which appears only in compounds (or only in compounds and derivatives)... The foreign-learned part of the English vocabulary also shows a number of special combining forms; cf. *electro-*, combining form of *electric*, in such compounds as *electromagnet*.

C2. 連結形(名詞)(1942年の引用参照のこと)ラテン語やそのほかの言語には、複合語(あるいは複合語と派生語)だけに現れる特別な連結形を有する語が多い。外国の影響を受

けた英語の語彙のなかにも、数多くの特別な連結形が見られる。例：複合語 *electromagnet* のなかの *electric* の連結形である *electro-*。

(下線と訳は筆者。改訂未完了。修正日：2019年6月)

連結形で作られる複合語は、新古典複合語が大半であるが、それとは別の古くから出現していた連結形もある。第3版（2021年9月時点）では、2218例が見出し語となっている連結形であるが、古英語の時代にも連結形の初出が認められている。最古の連結形は *half-* (893年頃) である。以降、*wil-* (古英語)、*forgive-* (1000年頃)、*wind-* (1175年頃)、*back-* (1225年頃)、*aver-* (1253年)、*break-* (1300年頃)、*spill-* (1320年頃)、*twi-* (1325年以降)、*swingle-* (1325年頃) などが現れており、ラテン語やギリシャ語語源ではないことに注意したい。

また、第3版では語源をたどる分析調査を経て、旧版では接辞だと思われていた形態素が連結形、つまり語根に修正されている例 (*-ill*, *-wise*) もある。

このように、合成語 (complex words) の構成要素の品詞分類は至難の業で、古い文献まで辿って語源を明らかにし、電子資料なども利用しながら頻度や初出年を特定し、正字法やほかの語根との接合のバリエーションに至るまで詳細に調査して初めて決定されるものなのである。

2. 分析方法

前節から、2つ以上の構成要素を持つ形容詞の分析では、複合語だけでなく、派生語と見なされているものも含めてその全体像を検討することが必要であると考えられる。したがって、本稿ではハイフンで結ばれた2要素以上の形容詞で見出し語となっているすべての形容詞を分析対象として、*OED* の品詞分類に従って分別作業を行った。

手順は次の通りである。*OED Online* の Advanced search という検索機能を利用して、2つ以上の要素がハイフンで結ばれてできた形容詞を抽出した。ワイルドカードを使用して **.** を検索語とし、「見出し語」(headwords) に採用されている「形容詞」(adjective) で、「廃語」(obsolete) を除いた現在使用されている語 (current) に範囲を指定した。なお、形容詞だけでなくその他 (特に名詞) の品詞が併記されているものも含めた。

全部で約71,700語がヒットした。このうち、比較的頻度の高い★6 (百万語当たり10～99回) 以上の語が6例 (★7: *might-be*, ★6: *year-old*, *well-known*, *long-term*, *co-operative*, *can-do*) で、★5 (百万語当たり1～9.9回) が95語、★4 (百万語当たり0.1～0.99回) が488語、以降★3 (百万語当たり0.01～0.099回) までで2991語が抽出された。

頻度は、*OED Online* のウェブサイトにある Key to frequency (OUP, 2018) によれば、1970

年以降現在までのデータで算出されており、赤色の星の数（1から8）によって示され、8が最も頻度が高く1が低い。★8から6までは比較的な日常的な文脈で目にする馴染みのある語彙であるが、★5になると文学的な語彙や教養的な文脈で使われる語彙が多くなり、★4は日常的に使用される語ではないが、それでもまだ母語話者には認識できる語で、小説や新聞で見かける語である、と説明されている。★3は小説や新聞などでは見かけないが、意味は不明瞭ではなく、特に口語的な形容詞を多く含む、と説明されている。★2（0.099回より少ない）では、特別なディスコースで使用されほとんどの人が知らない語となっているため、本稿では★3以上の頻度である2991例を分析対象とした。

抽出した例をすべてエクセルに移して、そのうちの①接頭辞・接尾辞を含み派生語に分類されるもの、②複合形容詞であるもの、③複合形容詞の構成要素の形態別の分類を、初出年別（50年間隔）で分析した。

年代による変化を調査するために、古英語（OE）から999年までと1000年から1399年まで、1400年以降は1999年までを50年毎に区切り、各期間に初出した例を形態別に分類した。なお、古英語の期間及び1000年から1399年までの期間は、抽出例が少数だったため、大きく区切った。また、2000年以降は該当する語がなかったため設定していない。

さらに、各要素の形態分析では、*OED*に形容詞（adj）と表記があっても、語尾が*-ed*であるものは、その項目に記載された語源と語根から、動詞の過去分詞と名詞の脱名詞化の場合に分け、両方の解釈が記載されているものは動詞の過去分詞形に含めた。

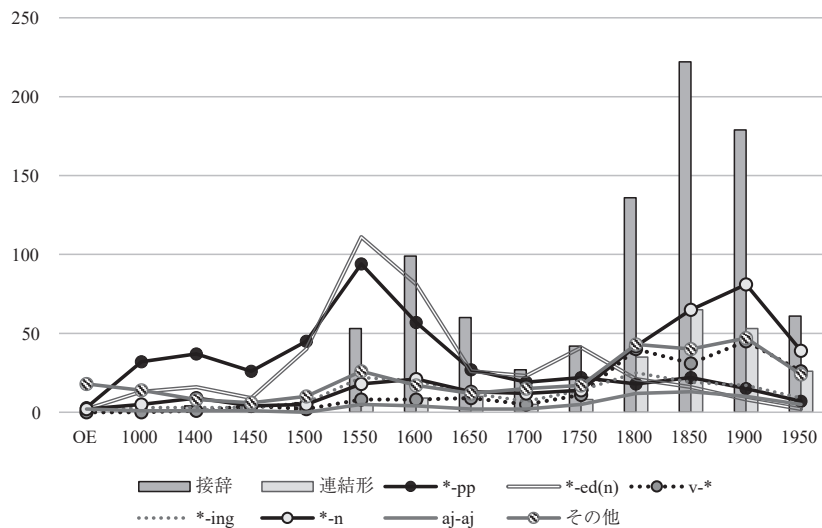
3. 分析結果

3.1. 構成要素の形態別変遷

分析結果を表1にまとめ、その値に基づいて構成要素の形態別変遷をグラフ化したものが図1である。

表1. ハイフンで結ばれた形容詞の形態別変遷 (OED Online 見出し語)

	OE	1000	1400	1450	1500	1550	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	1950	Total	%
接辞	0	1	4	6	6	53	99	60	27	42	136	222	179	61	896	30
連結形	0	1	2	1	1	5	9	10	5	8	35	65	53	26	221	7.4
*-pp																
adv-pp	3	27	29	23	39	71	35	19	12	7	9	6	1	0	281	9.4
n-pp	0	3	5	2	4	11	13	6	2	12	7	13	13	7	98	3.3
x-pp	0	2	3	1	2	12	9	2	5	3	2	3	1	0	45	1.5
*-ed(n)																
aj-ed(n)	1	12	8	9	35	93	59	20	18	27	15	11	6	1	315	10.5
n-ed(n)	1	1	5	0	4	17	18	5	5	11	3	3	2	1	76	2.5
x-ed(n)	0	0	3	0	1	1	4	1	0	3	3	2	0	0	18	0.6
V-*																
v-adv	0	0	0	2	0	3	5	5	4	8	33	22	31	12	125	4.2
v-x	0	0	1	2	2	5	3	4	1	3	7	9	14	14	65	2.2
*-ing																
n-ing	0	1	0	0	1	12	13	5	5	10	14	16	12	7	96	3.2
x-ing	1	2	3	3	5	10	7	7	2	4	11	3	5	2	65	2.2
*-n																
n-n	1	2	0	2	2	4	5	3	3	5	8	11	25	7	78	2.6
aj-n	1	3	9	2	3	14	16	10	9	9	34	54	56	32	252	8.4
aj-aj	2	1	1	1	0	5	4	2	2	5	12	13	10	5	63	2.1
その他	18	14	8	6	10	26	17	12	15	17	43	40	47	24	297	9.9



注：*-pp：語尾が動詞の過去分詞、*-ed(n)：語尾が脱名詞化-ed、V-*：語頭の要素が動詞の原形、*-ing：語尾が動詞のing形、*-n：語尾の要素が名詞、aj-aj：形容詞-形容詞

図1. ハイフンで結ばれた形容詞の形態別変遷 (OED Online 見出し語)

表1から、接辞はハイフンで結ばれた形容詞の見出し語の30%に相当し、図1からは接辞を要素に持つものが1600年から1649年に増加して初出語の3割超を占め、さらに1800年から1899年までは前述の期間の2倍程度の数まで急増していたことがわかる。特に1850年から50年間は、初出の派生形容詞は45%を占めた。また、表1と図1には示されていないが、接辞の総計896例のうちの大半が接頭辞であり、接尾辞でハイフンを伴って接合したものは73例だけであった。接尾辞は多くの場合、ハイフンを伴わずに語基に接合して綴られるため、抽出例は *-like* (68例)、*-style*, *-less* (2例)、*-ful* (1例) であった。

次に、複合形容詞について考察していく。(新) 古典複合形容詞は見出し語全体の7.4%に相当し、1800年から1999年の期間で急激に多くが出現し、1850年から1899年の期間で初出語の約13%を占めた。

図1では、時代別変化として顕著な傾向が認められる。語尾が過去分詞である複合形容詞と、脱名詞化の *-ed* で終わる複合形容詞がともに、1550年から1599年までの期間では最も多く初出している形態となっているが、1650年以降には激減し、以降現代に至るまで少数のままの傾向が続いている。一方、1800年以降それにとって代わったのが動詞の原形で始まるもの、つまり動詞句から転換 (conversion) した複合形容詞、名詞句の複合形容詞及びその他の種類で、以降の複合形容詞のなかでは最多の3種類となっている。その他とは、3つ以上の要素を持つ複合形容詞、外国からの借用語、押韻や母音交替のある音韻重複 (reduplication) がある複合形容詞、上述以外の形態を持つ複合形容詞である。

3.2. 各年代における初出語の例

では各年代にどのような語が初出したのか具体的に見ていくことにする。各年代に初出した派生・複合形容詞で頻度ランクが20位までのものを表2にまとめた。イタリックで表示されているものは連結語が要素である複合形容詞、下線が施されているものは接辞が要素となっている派生形容詞である。また太字は押韻や母音交替のある音韻重複がある複合形容詞である。

表2. 年代別初出語 (各年代頻度上位20語)

OE	north-west, north-east, south-east, south-west, well-done, north-easter, south-easter, south-western, ice-col, blood-red, all-white, well-born, milk-white, red-gold, iron-grey iron-gray, rose-red, all-good, honey-sweet, well-doing, iron-hard
1000	mother-in-law, long-lasting, long-lived, well-made, right-handed, well-fed, well-paid, well-advised, tiptoe tip-toe, well-disposed, well-pleased, empty-handed, toll-free, snow-white, full-grown, well-grounded, free-born, mid-afternoon, full-face, well-proportioned
1400	well-known, three-quarter three-quarters, <u>after-dinner</u> , ready-made, high-up, well-founded, well-formed, well-dressed, red-hot, well-rounded, well-chosen, well-covered, kind-hearted, three-man, well-mannered, near-sighted, knee-deep, sweet-smelling, well-understood, sun-dried
1450	well-informed, sit-up, native-born, well-meaning, mid-term, <u>pre-eminent</u> , well-ordered, slow-moving, well-kept, heavy-handed, well-taken, blue-grey, well-endowed, riff-raff riffraff , open-mouthed, <u>self-willed</u> , red-headed, mid-year, well-travelled well-traveled, jet-black
1500	long-ago, all-night, well-prepared, make-peace, well-placed, like-minded, high-minded, long-suffering, <u>non-resident</u> , well-written, red-haired, God-fearing, one-eyed, good-sized, well-spent, bare-headed, mother-of-pearl, all-knowing, well-deserved, topsy-turvy
1550	year-old, two-way, well-defined, well-established, old-fashioned, stand-up, do-nothing, middle-aged, short-lived, above-mentioned, <u>self-sufficient</u> , worn-out, <u>pre-existing</u> , one-to-one, brand-new, well-educated, wind-up, do-little, fine-grained, good-natured
1600	might-be, <u>co-operative</u> , can-do, one-way, turn-over, <u>co-ordinate</u> , grown-up, <i>Anglo-Saxon</i> , man-made, three-years three-year, <u>self-conscious</u> , <u>self-evident</u> , time-consuming, <u>self-contained</u> , <u>non-existent</u> , turn-up, ever-present, well-organized, able-bodied, far-off
1650	turn-out, long-standing, <u>after-death</u> , one-inch, do-good, <u>non-Christian</u> , <u>self-report</u> , blue-green, dressed-up, <u>self-imposed</u> , deep-rooted, second-rate, duty-free, foot-long, white-face, <u>self-appointed</u> , <u>self-contradictory</u> , run-down, <u>self-consistent</u> , well-adjusted
1700	stand-still standstill, deep-seated, all-important, good-looking, cast-off, <i>ill-fated</i> , <u>post-mortem</u> , well-documented, fall-down, <u>self-directed</u> , well-planned, all-inclusive, open-minded, roll-up, <u>self-explanatory</u> , <u>self-regulating</u> , white-haired, single-handed, <i>Anglo-Norman</i> , well-supported
1750	sit-down, take-off, <i>Anglo-American</i> , well-developed, light-weight light weight, one-sided, <u>self-employed</u> , well-to-do, stand-by, year-round, <i>cross-country</i> , left-off, show-off, <i>Anglo-French</i> , make-believe, old-time, <i>Anglo-Irish</i> , <u>up-river</u> , Irish-American, <u>off-duty</u>
1800	make-up, go-back, take-up, far-away, present-day, long-range, far-reaching, high-level, wake-up, go-ahead, catch-up, all-ages, face-to-face, run-out, high-speed, <i>Afro-American</i> , first-order, open-ended, know-nothing, low-level
1850	long-term, large-scale, X-ray, part-time, <i>socio-economic</i> , <u>infra-red</u> , post-war, left-behind, day-to-day, small-scale, <u>under-developed</u> , two-dimensional, <i>cross-sectional</i> , left-out, far-back, full-scale, blue-collar, <u>post-colonial</u> , get-together, <u>pre-war</u>
1900	carry-out, short-term, set-aside, put-down, value-added, white-collar, make-out, <u>inter-war</u> , <i>audio-visual</i> , cover-up, must-see, age-related, all-points, one-arm, high-rise, all-up, <i>multi-purpose</i> , <u>non-violent</u> , <u>on-stage</u> , same-sex
1950	high-tech, double-blind, spin-off, no-fault, <u>non-Hodgkin</u> , user-friendly, no-name, dial-up, <u>pro-life</u> , <i>multi-mode</i> , <u>pro-choice</u> , peer-to-peer, <u>post-structuralist</u> , omega-3, client-side, <u>up-market</u> , push-out, surface-to-air, wall-to-wall, <u>extra-virgin</u>

注：下線：接辞を含む派生語形容詞、イタリック：連結形を含む（新）古典複合形容詞、
太字：音韻的重複のある複合形容詞

表2では、やはり前述と同様の傾向が見られる。比較的初期の1000年から1549年までは *well-done*, *well-born*, *well-known*, *well-informed*, *well-prepared* の様な副詞 *well-* に動詞の過去分詞が付いた形式が多数を占め、1000年からは8例、1400年からは9例、1450年からは7例、1500年からは5例が含まれている。しかし、1550年以降は3例以下になり、1800年以降ではこの形式は表2には見られない。

同様に脱名詞化の形態素 *-ed* が語尾に付いた複合形容詞では、まず1000年からの期間に *empty-handed* が挙がっており、1400年からは2例 (*kind-hearted*, *near-sighted*)、1450年から3例 (*heavy-handed*, *open-mouthed*, *red-headed*)、1500年から最多の8例 (*like-minded*, *high-minded*, *red-haired*, *one-eyed*, *good-sized*, *right-handed*, *good-sized*, *bare-headed*)、1550年から5例 (*old-fashioned*, *middle-aged*, *short-lived*, *fine-grained*, *good-natured*) が挙がっているが、1600年の *able-bodied* 以降は目立たなくなっている。

下線で示した派生語が1600年以降に増加していることも、表2から明白である。1450年から *self-* が語頭要素である派生語が上位20位に入ったが、それ以降もこの形式は多く初出している。また、1600年からは2例 (*co-ordinate*, *co-operative*) が、1850年からは5例 (*infra-red*, *post-war*, *under-developed*, *post-colonial*, *pre-war*) と、多様な接頭辞が接合した派生語が初出している。

連結形では、1600年からの期間で *Anglo-Saxon* が初出して以降、*Anglo-* は1700年の *Anglo-Norman*、1750年の3例 (*Anglo-American*, *Anglo-French*, *Anglo-Irish*) と使用頻度が高い。また、1700年からは *ill-fated*、1750年からは *cross-country*、1800年からは *Afro-American*、1850年からは *socio-economic*, *cross-sectional* が、1900年からは *audio-visual*, *multi-purpose* が挙がっており、連結形の種類も多様になっている。

名詞句は、1850年以降では顕著になり、1850年では6例 (*long-term*, *large-scale*, *X-ray*, *part-time*, *small-scale*, *full-scale*)、1900年では6例 (*short-term*, *white-collar*, *all-points*, *one-arm*, *high-rise*, *same-sex*)、1950年では5例 (*high-tech*, *no-fault*, *no-name*, *omega-3*, *client-side*) が挙がっている。

動詞句も名詞句と同様で、1800年では8例 (*make-up*, *go-back*, *take-up*, *wake-up*, *go-ahead*, *catch-up*, *run-out*, *know-nothing*)、1900年では5例 (*carry-out*, *set-aside*, *put-down*, *make-out*, *cover-up*)、1950年では3例 (*spin-off*, *dial-up*, *push-out*) が含まれている。

また、1950年からの期間では、3要素の複合形容詞が3例 (*peer-to-peer*, *surface-to-air*, *wall-to-wall*) も含まれていることにも注目しておきたい。

年代は遡って、古英語の時代には、方角を表す語 (*north-west*, *north-east*) や、色を直喩的に表す語で、例えば血のように赤い *blood-red*、バラの赤色の *rose-red*、鉄の様に灰色の *iron-grey*、乳のように白い *milk-white* が初出していることが特徴的である。

4. 終わりに

OED Online の初出年と構成要素の品詞の記載を丁寧に拾い上げていくと、驚くべき新しい発見があった。西部 (2021) で言及した、過去分詞語尾の複合形容詞が比較的早い時代に出現し増加するものの以降激減するという傾向が証明され、その後の複合形容詞の形態が動詞句からの転換や名詞句などに移り変わっていくという新事実が明らかになったことは、大きな意義があると考えられる。

参考文献

- Bauer, Laurie (1983) *English Word-formation*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Oxford University Press (2018) Key to frequency. Retrieved from <https://public.oed.com/how-to-use-the-oed/>
- (2021) *Oxford English Dictionary Online*. Available from <http://www.oed.com/>
- Nishibu, Mayumi (2019) 「OED Online における複合形容詞の分析」『文明21』第42号 pp. 109–122.
愛知大学国際コミュニケーション学会
- (2021) 「OED Online における接尾辞 -ed 型複合形容詞の分析」『文明21』第44号 pp. 93–102.
愛知大学国際コミュニケーション学会